

# 若年妊娠（10代の妊娠）に関する報告

## — 高知市内の一公立病院における調査より —

高知赤十字病院

千 浦 淑 子（19回生）

### はじめに

現在、「性」についての種々な情報が氾濫する中で、卒後数年、市役所保健婦、産婦人科病棟看護婦などを経験後、今は助産婦業務を主とする看護婦として、当院産婦人科病棟に就職している。母性看護を自分自身の専門分野として助産婦学科において学びを深め、新しい職場で新鮮な意欲をもって取組もうとしていた時、高校生の妊娠や10代の妊娠に接した。妊婦としての意識や母性としての自覚を全くもたないまま妊娠してしまった現実を見て非常にショックだった。

### 目 的

勤務について3年目を迎えているが、私が感じてきたことを何らかの形であらわし、整理してみようと思った。またそのことで問題点をはっきり把握できるのではないかと考えた。また思春期、青年期の性教育、母性保護への保健指導活動についても考えを深めることができるのではないかと思った。

### <期 間>

1978年4月～1980年6月を調査の中心とした。

### <対 象>

高知市内の公的総合病院の産婦人科病棟への入院者で10代の者、外来受診者についても10代の妊娠している者、として対象を選んだ。

### <方 法>

外来受診時のカルテ

病棟入院時のカルテ 看護記録などから次の調査事項について検討を試みた。

### <調査事項>

- ① 最初に妊娠に気づいたのは誰か
- ② 妊娠を自覚したのは何才の時で、その時の妊娠週数は何週だったか
- ③ 初診の医療機関はどこか。受診時の主訴は、何か。
- ④ 当院へは妊娠何数で受診しているか。誰と来院しているか。

- ⑤ 妊娠したことを誰に相談したか。
- ⑥ 妊娠となった相手はどんな人か
- ⑦ 分娩・育児を行なったか。人工妊娠中絶を行なったか。
- ⑧ 今回の妊娠により今後予測される影響はどのようなことがあるか。
- ⑨ その他

以上の事項をとりあげた。

#### <結果>

当院の産婦人科外来受診者数は年間約6000名、年間分娩件数約600～650件の規模である。

①について、本人が大部分である。(母、友人に指摘されてもそれ以前に妊娠したという疑いを本人がもっている)

②妊娠早期のもので、妊娠8週で受診している。メンスの遅れにより妊娠に気づいたものである。(特殊な事例で、妊娠を自覚しなかったという者もある。妊娠を受容できない精神状態である場合、否定したい感情で抑圧されるためとも考えられる。また初めての感覚であるため、つわりの時期、胎動の感覚も胃腸症状と思ったりしていたように話していた)

年齢では16才から19才まで分布しており例数が少ないので、妊娠自覚時の年齢と妊娠週数については関係して検討することにならなかった。

③については、個人開業産婦人科医院が多く、他には、内科系(胃腸科系)医院を初診している者もあった。

本院産婦人科外来を初診機関としているものでは、10代の妊婦の婚姻しているものがほとんど初診から妊娠期間中続けて受診している。また姓の変更(入籍)が妊娠して後になっている者もある。

未婚者の妊婦の場合で初診で妊娠の診断を受け以後の受診が全くないものがある。また上記したように、他医院から紹介されてきた未婚妊婦が多い。

④については、当院受診の時期では、妊娠8週から、分娩時の41週になっての者もある。妊娠の初期に当院を受診している者は初めから当院で分娩する予定の者であるが、妊娠中期以後に初診している者は、他医院よりの紹介入院や、救急車による入院などになっている。

⑤については、不明、だれにも相談していないという傾向である。相談相手もないまま未婚者の場合には悩みが深かったらうと想像する。

未婚者で妊娠した者の入院生活を見ただけでは、自分自身の母親を召使いでも使うような態度でいた者で、服装、言葉使いなどが目にあまる者、妊娠中絶で入院しているにもかかわらず、大勢の同年令の男女の友人を見舞いによび、大声で歓談してみたり、喫煙習慣のある者がいた。

⑥、⑦について未婚者17名の妊婦のうち分娩にいたったもの4名以外は、人工妊娠中絶13名、3名については相手方男性の同意書を得ている。他は両親又は母親が同意書に署名している。妊娠中絶した者13名中4名が子宮外妊娠で、未婚、初妊にて片側の卵管を失っている。

数値としては、私を感じていたよりも予想外に10代の妊娠の数は少なかった。これは入院の時点で20才となった者や、我々看護者との対話や、入院中の態度などから、すでに成人に達している者でもまだ10代の者のように感じられた印象が強かったせいである。また成人に達している者でも、初めての妊娠を未婚で経験し人工妊娠中絶を選んだ患者に対する個人的な感情が強かったため、私が予測していた10代の妊娠者数より少ない実数となったと思う。しかし生命の尊さを思えばまた母性の真に発現されるべき時を考えれば、一人の胎児の生命も奪うことは誰にも許されていない。

表 10代の妊婦数

78年4月～12月(9カ月間)	5名	既 婚	2名	未 婚	3名
79年1月～12月(12カ月間)	17名	"	10名	"	7名
80年1月～6月(6カ月間)	9名	"	2名	"	7名
計	31名		14名		17名

(全例分娩) (分娩4例)

10代の既婚者の中には経産婦が3名含まれており、妊娠中絶既往のある者もあった。夫の職業は自営農業者、商店経営者などであり、本人は無職(主婦)である。

未婚者分娩4例のうち、1例は夏休みに集団暴行の形で妊娠し、その後本人が肥満してきたとばかり思っていた。家族の母も知らず、高等学校で健康診断などもあったであろうが、分娩まで全く受診していないケースがあった。

分娩後、児は本人の両親がひきとった者1例、施設へ託された者1例、里子となった者1例、不明1例である。不明は何らかの養育者に託されたがカルテ上明確な記載がないためである。妊婦と児に関わる秘密事項であるためと考えさらに調べることはしなかった。

⑧今回妊娠より次回妊娠や将来に対する考えられる影響については、あくまで推論となるが、以下羅列的ではあるが述べてみたい。特に未婚者の場合、結婚、性交渉、妊娠・分娩などへの障害や嫌悪感、不安感を抱くようにならないか。育児不適応、母性機能発揮障害などをひきおこすのではないか、人工妊娠中絶は人工的な頸管拡大の処置による頸管無力症や頸管不全症がおこり、流早産の原因ともなる。また頸管部の硬化萎縮などから分娩時の頸管裂症、出血の誘因とも考えられている。また胎盤付着位置異常は、低置胎盤、前置胎盤、胎盤早期剝離、胎盤娩出遅延、ゆ

着胎盤、出血、貧血となる場合も考えられる。

また続発不妊症や子宮内膜感染症や付属器炎、膣炎、その他の性器感染症となる。

子宮内容を急激に妊娠から不妊状態にするため内分泌ホルモン系の急変動による不定愁訴、月経不順、感染抵抗力減退などとなる。

乳房は妊娠により増大変化が始まっているが授乳を行なわないため、人工妊娠中絶が中期以後であると強い緊満をおこしその後硬縮し、次回分娩後に乳房の異常緊満や乳汁分泌障害・困難をひきおこす。また乳ガンとの関連性についてもいわれている。

すでに成人していたのでこの対象者ではなかったがRh(-)の血液型の者が10代で血液型を知らず妊娠中絶をしたという場合があった。

病産院を受診してきた者への保健指導はすでに妊娠している場合であり、10代の未婚者の妊娠を防ぐためには時期として限界がある。人工妊娠中絶で入院している者への避妊指導も10代の者である場合、今回の妊娠は突発的な事であり以後結婚までは性交渉をもたないだろうとか本人の母親の責任であるという感覚で接するため、失敗が繰り返されるおそれが多い。本人、家族、将来の結婚などへの考慮もあって秘密性が高い患者であるため、開かれた保健指導はなされぬままが現状である。

女性が母性として社会的にも自立し、幸福であるために積極的に思春期、青年期の性について考えていかねばならない。10代に何らの自覚ももたぬまま妊娠すると、生命の誕生を何にかかけがたい素晴らしい体験として実感することなく、中絶といういまわしいできごととして罪の意識や肉体的にも不快な状態に悩まされることになる。これ以上母性を傷つけ精神的にも肉体的にも大きな後遺症を残す人工妊娠中絶をなくしていきたい。若い男女が成熟した肉体の欲望に身をまかせることなく、自分たちの将来と子孫の将来に対する責任感と使命をもてるような性教育を工夫していかなければならないと思う。学校教育の場でも家庭教育の場でも、母性各期における適切な指導が受けられるように切実に感じる。

〔参考文献〕

- |      |                      |                    |
|------|----------------------|--------------------|
| 朝山新一 | 現代学生の性行動<br>男女学生の性生活 | 白井書房               |
| 江幡玲子 | 若年婦人の妊娠<br>青年期の母性保健  | 周産期医学 Vol. 8 No. 6 |